

## Sue Bridehead の人物像再考

堀川 史子

Thomas Hardy (1840-1928) の *Jude the Obscure* (一八九五年初版) の主要登場人物の一人 Sue Bridehead は矛盾が多く掴みどころがないと言われる人物である。その彼女を理解しようとする際に鍵になるのは彼女のセクシュアリティをどう捉えるかである。批評家達の多様なスー論の多くも、スーという人物の性・婚姻と絡んだ諸問題を解決しようとする努力であるといえる。本発表では、特に語りの様式に注目し、スーの動機と語り手の彼女に対する態度を検討することで、性ということと絡めたスーの人物像について一見解を提示する。

文体論や物語理論で提案されている語りの様式の類型法を参考にし、スーに対する語りを次の四つのタイプに分けられると考える。一、他の登場人物(特にジュード)の視覚や意識を通しての語り。二、中立的な語り手の視点で外面的観察に限られている語り。三、いわゆる全知で介入的な語り手。スーの内面が報告・描写され、何らかの仕方で語り手の存在一つまり語り手の広く深い知識や理解一がより顕著に感じられる語り。四、語り手の視点ではないが(つまり知識が当然限られている他の作中人物の視点ではない)、スーに対し限定的な知識しかないことが「疎遠の語」すなわち認識様態的法表現 (epistemic modal expressions) によって示されている語り。

認識様態的法表現、あるいは「疎遠の語」とは、叙述内容の真

偽に対する話し手の疑惑や確信などの心的態度を表現したもので、法助動詞 (could, may, must, might, should) や、副詞 (maybe, perhaps, probably, certainly) や、有様を表わす seem to, appear to などがこれに含まれる。

この四つのタイプのうち、*Jude the Obscure* おけるスーに関する記述で大部分を占めるのは一と二で、三と四はこれらの基準から逸脱する例外的パターンになっている。一、二ではスーの内面は読者にとり謎となる。この二つが主流であることが、批評家間の意見の相違に反映されているようなスーの人物像の不確定性の一原因であるといえる。ところが、三、四のタイプは、語り手によりスーの内面が窺わせられ、また語り手の態度が暗示される箇所であり、スーの人物像を考察する際に注目すべきものである。これらの語り手の例を観察すると、スーの性的性格の理解に対し興味深い結果が得られる。

スーに関して全知介入的(三のタイプ)と疎遠の(四のタイプ)語りになっている箇所を、p. 108, 109-10, 138-9, 161, 253, 261-2, 341-6, 351 に現われるものを中心に調べたが、この要目では最初の例であるスーとフィロトソンの算数のレッスンの場面 (p. 108, 1-3-10) の分析・考察過程の概略を言う。そこでは、スーの内面描写は "as if" と "perhaps" の認識様態的法表現が使われ疎遠の語りのタイプになっており、他方フィロトソンの心の内面的法的表現無しで報告され読者には透明になっている。最初の法表現を含む所 ("with a little inquiring smile at him, as if she assumed that, being the master, he must perceive all that was passing in her brain, as right or wrong") は外見であり、<sup>1)</sup> "as if" の節の内容が本当に彼女の心中で起きた事かどうかについて語

り手の確約はないわけであるが、もし我々がこの判断を受け入れ  
るのならば、彼女の心は算数のレッスンに集中していることになる。  
それに続く文は、フィロトソンが教師という立場からは離れた  
感情をスーに持ち始めていることを事実として提示する。よっ  
て、ここまでで読者には無心にレッスンを励む若い娘とその娘に  
教師らしからぬ感情を持つ中年の教師という構図が与えられる。

ところが、その次の文（perhaps she knew that he was thinking  
of her thus）は、スーが自分の女性としての魅力が男性であるフ  
イロトソンに影響を及ぼしていることに認識がある可能性を表わ  
す。更に、この可能性は先程の無邪気なスーのイメージを崩すこ  
ともにもなり得る。というのは、もしスーが敏感にフィロトソンの  
心を読み取っているならば、彼女の微笑みは無邪気どころか実は  
魅惑の微笑みであるかもしれないという疑いが出てくるからであ  
る。小説のかなり早い段階でこのようにスーの性的な面が可能性  
としてながら暗示されていることは注目すべきである。また、認  
識様態的法副詞（perhaps）の使用には、一方でスーを不可解な  
ものとし彼女の性的性質については断定できないとしているよう  
で、実はよく見透かしてスーの性的意味を持つ行動を高めか  
ら眺めている、という冷静な態度の語り手を読み取ることができ  
る。

その他の三、四タイプの語りの場を追っていくことで、  
次のようなスー像が浮かび上がってくる。彼女は自分の男性に対  
する影響力に敏感であり、これを利用して男性に力を行使する  
といったような操縦的・搾取的面があり、自分の愛情とは関係なし  
に複数の男性を同時に引き付けておこうとする願望がある。また、  
男女の性愛関係での女性の身体的魅力の第一義性を本能的に悟っ

ている。このように、一見無性的なことが強調されているスーで  
あるが、彼女は紛れもなく性的生物の人間の一人である。しかし、  
その反面、スー自身がこうした彼女の性的性質とそこから発する  
利己的行為にどの程度自覚があるかは微妙ではっきりしない。む  
しろ、スーの直接的心理と、彼女の行為から推測される性的動機  
とは一致しないと考えられる。つまり、彼女は無意識にも性的に  
有意味な言動をしてしまう人物なのである。スーは、小説最後で  
自分が性の法則に支配されていることに気づき、ジュードを去る  
ことでそれから逃れようとする。だが、この行動さえも、伴侶選  
択という意味から、その性の法則の原則にまたも無意識にも忠実  
に準ずるものになってしまっているという悲劇的な皮肉となっ  
ている。小説全体の意義という視野からは、スーという人物像は、  
この小説のペシミズムの本質ともいえる「逃がれることはできな  
い」というメッセージを体現しているといえよう。

\* 使用テキスト Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (Oxford:

Oxford University Press, 1985).